



## 会報に寄せて

理学部同窓会代会長 物理支部長 麩 沢 祐 一

今年度、同窓会長を各支部長で輪番に務めることになりましたので、今回は僭越ではありますが、物理支部長の私が、代行として書かさせていただくことになりました。

さて、現在（令和2年7月）、コロナ禍のために、世界中が大きな影響を受けております。先日、訪れました新潟大学理学部も講義など教育活動が行うことのできない状況で、キャンパスには学生が見当たりませんでした。日常生活も、ソーシャルディスタンスの確保やマスク着用など様々なことに気をつける必要があるのですから、大学の対応は当然のことです。しかし、学生にとっては、学ぶということが厳しい環境であることが本当に心を痛めております。各支部の支援が一層期待されるものと感じております。

学ぶことを考えたところ、自分の学生時代はどうであったかと思い出されました。一言で言えば、無我夢中でありました。どう理解すればよいかはわかっていなかったことです。しかし、なんとなくそれを感じていて、自分でどうすればいいのだろうかとき常々心の中で叫んでいました。物理を選んで、よかったと思う反面、混沌とする中であえいでいました。

今思うと、あのときこうすればよかったと感じますが、学生の時は今やっていることしか見えておりませんでしたから、こうやった方がよいと言われてもできませんでした。自分で気づいて、それを乗り越えるしかないのでしょう。

現在、私立高校で物理を教えています。私の轍を踏まないように、生徒には物理を身につけていけるように指導しております。授業で、そして質問に来る生徒に教える時に、理解することは物理の考え方を身に

つけることと、物理において様々な見方考え方を経験させるように努力しています。

私は学生時代に仲間で毎週土曜の午後に学んだゼミに影響を受けました。毎年、定評のある専門書を選んで、交代でチューターを決めて、その人が中心になって説明し、他の学生が疑問や考え方、意見などを議論しました。1年目は、シュポルスキー著「原子物理学Ⅰ」、2年目はランダウ・リフシッツ著「場の古典論」、3年目は朝永振一郎著「量子力学Ⅰ、Ⅱ」でした。

私たちは、毎週このゼミに向けて前もって時間を割きました。物理の専門書は、難解な理論以上に、数式の計算が大変でした。本の中に書かれている数式を、導くことが難しかったのです。特に、「場の古典論」は大変でした。導くのが困難なこともありました。しかし、本を読むことで、読んだという充実感、導けたという経験、優れた学者の考え方と触れること、とにかく物理と向き合う多くの時間を経験するなど、得るものは大きかったです。何よりも仲間と考えを話し合ったことが刺激になったり理解を深めよかったです。

そして、物理の好きな仲間と膨大な時間を学ぶことに費やし、模索したことで、何がどう大切なのか身についてきたように思います。そのゼミを理学部の先生方や院生の方々から支援していただいたことができた要因です。やはり、その環境を新潟大学理学部物理学科のおかげであります。深く感謝いたしております。

今後とも、同窓会として理学部の教育活動を支援していきたいと思っております。どうかよろしく願っています。



## 理学部の近況

理学部長 前野 貢

同窓会の皆様には、日頃より大変お世話になっております。新潟大学では今年2月に学長が交代し、新しい執行部体制となりました。牛木辰男新学長は、高橋姿前学長の方針を引き継ぐとともに、2年後にスタートする第4期中期目標・中期計画での新潟大学のさらなる飛躍を目指して助走を始めております。一方理学部は、改組により一学科制をスタートして4年目を迎え、大多数の学生が新たなカリキュラム下で教育を受けた学生となりました。いよいよ今年度末には新理学部の第一期卒業生を輩出します。本会誌では、最近の理学部の様子を報告します。

### ●新型コロナウイルス感染症について

昨年12月、中国武漢市の海鮮市場で感染症による肺炎患者が発生したとのニュースが小さく報じられました。当時はこの感染症によって日本社会にこれほど大きく影響を受けることは想像がつかせませんでした。1月後半になると、中国からの旅行者を介した小さなクラスターが、日本でも複数発生するようになってきました。理学部では2月に予定していたアジアからの留学生の受け入れ事業を夏期に延期し、少しずつ身近に影響が及ぶ状況となってきました。3月以降ヨーロッパなどから二次的にもたらされたウイルス感染が拡大の一途をたどり、4月には日本全国で緊急事態宣言が発表されるに至りました。5月以降は、感染をある程度制御ができてきている状態となっていますが、第二波の流行が起こるかどうかが、予断を許さない状況が続いております。

多くの大学と同様、新潟大学においても、第1学期のすべての授業科目はオンラインで行っています。オンライン授業に対するアンケート調査によると、予期しないときに通信障害が起きることもあり、授業が途切れてしまうこともあるそうです。通信の問題のみならず、教員や同級生とのコミュニケーションの難しさを感じている声もあります。特に新生生にとっては、大学への通学を一度も経験しないままオンライン授業だけを受けるといった異常な事態が続いています。教員と新生生、新生生と先輩、新生生同士の安心感のあるつながりをどのように提供するかは差し迫った課題です。さらに理学部では、実験・実習科目が学修にとって不可欠な科目ですが、第1ターム中のすべての対面実習は実施されていません。第2タームからは、十分な感染防止策をとることができる実験・実習科目のみ慎重に実施し始めることとなり、一歩ずつではありますが、平常の教育に近づける努力がなされています。

### ●新潟ジュニアドクター育成塾について

令和元年度から5年間、科学技術振興機構（JST）の支援を受け、新潟大学は「自然と人の共生を科学する新潟ジュニアドクター育成塾」という事業をスター

トさせました。一年目である昨年度は、新潟県在住の小学校5年生から中学校2年生まで43名が選抜され、各分野の科学基礎講座のほか、糸魚川ジオパーク、新潟大学脳研究所、県立植物園、一正蒲鉾（株）などで体験学習を行いました。好奇心旺盛な小中学生は、様々な体験学習に眼を輝かせ、担当講師も驚くくらい積極的に質問をしていました。塾生にとっては、「鉄は熱いうちにうて」という表現がピタリと当てはまる素晴らしい学修の機会となったと自負しております。今年度は1年目のプログラム修了生の中から10名がさらに選抜され、個々の課題研究に取り組むことになっています。また第二期生を40名募集し、新たに基礎科学講座、体験学習をスタートさせます。本取組みを継続することにより、新潟および日本の未来の科学技術を担う人材がひとりでも多く育つことを期待しています。

### ●入試改革について

理学部では令和3年度の入試制度について、いくつか変更を計画しています。重要な変更のひとつは総合型選抜（いわゆるAO入試）の導入です。基礎科学を担う理学部では、実験好き、探求好きの高校生に入学してほしいと考えています。そこで高校時代に理数分野の課題研究に取り組んだ経験のある学生を対象とした選抜を行うことにしました。スーパーサイエンスハイスクール事業に採択されている高校は新潟県では5校、近隣の福島県、栃木県、群馬県、山形県、秋田県などを含めると20校ほどあります。それ以外にも理数クラスで独自の課題研究に取り組んでいる高校もあります。総合型選抜では、取り組んだ研究内容のプレゼンテーションと口頭試問を課し、どのように課題研究に取り組んだのかを説明してもらいます。また、前期日程入試の受験科目の変更も予定しています。これまでのA選抜、B選抜、C選抜を、理数重点選抜、理科重点選抜、野外科学志向選抜とし、募集人員、科目、配点などを見直しました。さらに学校推薦型選抜では、基礎学力の担保を目指した変更を予定しています。今年度は新型コロナウイルス感染症防止の観点から、高校訪問の機会は最小限とし、オンライン説明会、オンラインアドミッションフォーラムを予定しています。入試変更の意図などを高校側に十分にお伝えできるかどうか不安もありますが、工夫して広報の強化を進めていきます。

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、今年度は理学部同窓会におかれても総会、講演会、懇親会などの開催が見送られており、会員の皆様にとっても我慢の年となっていることと存じます。理学部の改組後の教育、研究についてもいろいろとご心配と存じますが、今後もできる限り機会をとらえてご説明したいと思いますので、変わらないご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

## 学 科 だ よ り

### 数 学 科

#### 数学プログラム

プログラム長 三浦 毅

昨年度は2名の学生が9月に卒業し、27名が3月に卒業を迎えました。卒業式は3月23日に予定されました。しかし、この頃は誰も想像していなかったであろう、コロナウィルスの影響のため人の密集を避けなければならず、予定されていた卒業式は中止となりプログラム毎の対応となりました。数学プログラムでは、卒業生が密集しないように配慮した上で、プログラム長から卒業証書が一人一人に手渡されました。卒業式だけでなく、卒業に関連したイベントの多くが中止あるいはキャンセルせざるを得なくなったものと思います。卒業式を仲間達と迎えることのできなかつた27名の卒業生だけでなく、4年間数学を通して学生の成長を見届けてきた我々教員も残念で仕方ありません。そのような状況ではありましたが、卒業生はそれぞれの人生を歩みだしました。大学院に進学し数学をさらに専門的に学ぶ学生、教員採用試験に合格し教壇に立っている学生、今年度は残念ながら教員になる夢は叶わず来年度にむけて準備をしている学生、公務員や企業に勤め社会に出て働いている学生と様々です。これまでの常識が一切通用しなくなる新たな時代が突然訪れた感じですが、新しい社会を創造し活躍してくれることを信じています。

昨年度末から今年度にかけて、数学プログラムでは大きな教員の入れ替わりがありました。印南信宏教授と羽鳥理教授が令和2年3月末日をもって新潟大学を御退職されました。印南先生は昭和63年から32年に渡り、羽鳥先生は平成7年から25年に渡り、新潟大学の教育・研究に携わってこられました。これまでの新潟大学、特に理学部数学科・理学科数学プログラムを支えてこられた先生がお二人同時にご退職されることは寂しく悲しい出来事です。この場をお借りして印南信宏教授、羽鳥理教授に感謝を申し上げます。

令和2年3月1日に折田龍馬先生が助教として新潟大学理学部に着任されました。折田先生のご専門は幾何学です。また、6月1日には大井志穂先生が助教として新潟大学理学部に着任されました。大井先生のご専門は解析学です。折田先生と大井先生のお二人には、印南先生、羽鳥先生が退職されたことによる大きな穴を埋め、若い力で数学プログラムを発展させてくれることを期待しています。

### 物 理 学 科

#### 物理学プログラム

プログラム長 宮田 等

令和元年度に物理学プログラムを卒業した学生は44名でした。その内26名が大学院へ進学しました。進学率は約60%になりますが、4名は他大学への進学でした。企業等への就職率は100%で、県内企業に6名、県外企業9名、県外公務員1名、県内教員1名、県外教員1名でした。

人事異動としては、この春に原子核実験研究室の武智麻耶助教が、ご事情により退職されました。武智助教は平成26年に着任され、原子核の実験的研究をされると共に、物理プログラム3年生向けの物理学実験などを担当されました。学部学生や大学院生の教育・研究指導に熱心に取り組んで下さいました。

本学には、大型の競争的研究費を獲得し、特に優れた研究業績を有する准教授には「研究推進機構研究教授」の名称を付与し報奨金を支給する制度があります。令和元年度の受賞者7名が決定し、そのうちの一人に物理プログラムの早坂圭司准教授が選ばれました。令和2年3月5日に行われた授賞式で学長から表彰されました。

学生の受賞については、令和元年10月に素粒子理論研究室の奥井恒さん（博士課程2年）が日本物理学会秋季大会において学生優秀発表賞を受賞、11月には宇宙物理学研究室の武田芽依さん（修士課程2年）がThe 29th Workshop on General Relativity and Gravitation in JapanにおいてPresentation Awards（ポスター賞）を受賞、高エネルギー物理学研究室の團優菜さん（修士課程1年）がFlavor physics workshop 2019においてポスター賞を受賞、物性実験研究室の古江優作さん（修士課程1年）が日本高圧力学会の第60回高圧討論会においてポスター賞を受賞しました。

今年度は、新型コロナウイルスの影響で4月の授業開始が遅れ、4月20日から、いわゆるZoomなどを用いた非対面型の遠隔授業でスタートしました。教員は、ライブ配信できるスライドや動画を作る作業などに追われて、現在も例年と全く違う非常に忙しい時間を過ごしています。また、実験室等での研究活動も徐々に再開していますが、コロナ感染症に対する対策を十分にとりながら行うことを心がけています。

物理学プログラム内に作られた「反転授業による授業改善研究会（大野義章教授・代表、中野博章准教授、根本祐一准教授）」が、「令和元年度新潟大学学長教育賞」を受賞しました。本研究会は「令和元年度新潟大学学長教育助成制度」のもとで「反転授業による専門講義科目のアクティブ・ラーニング化」に取り組み、特に優れた成果を挙げたと認められ受賞となりました。反転授業では、学生はオンライン事前学習動画で予習を行い、グループディスカッションやプレゼンテーションを交えた授業で疑問点の解消や理解の定着を目指しています。今後、Zoom等を用いた遠隔授業のより一層

の広がりとともに、ウィズコロナ時代の新しいスタイルの授業が開発されてくると思われま。同窓会の皆様には、引き続きご支援のほどよろしくお願い致します。

## 化学

### 化学プログラム

プログラム長 古川 和広

今年度は年度当初よりコロナ禍で、保護者の方々や学生諸君にはご心配、ご不安な日々が続いております。化学プログラムでは、14名の教員と3名の職員、計17名で、学生の教育から生活までのサポートをできるよう励みたいと考えております。

学生の動向につきましては、本年の3月末には37名の4年生が無事卒業し、1名が教員に、5名が県内外の企業等へと就職し、31名が大学院へと進学いたしました。残念ながら卒業式は行えませんでした。卒業された皆さんは新たな環境で活躍すべく切磋琢磨されていることと思います。大学院へ進学された31名のうち29名は新潟大学大学院自然科学研究科化学コースに進学となっており、今年度は卒業生の約8割と多くの学生が大学に残り、引き続き研究に勤しむこととなります。コロナ禍の今年度、各研究での彼ら自身の研究に加え、後輩の指導も含め、共に研究室を運営して行くことができることに特に大きな期待と喜びを感じております。

この4月には卒業生と入れ替わり、入学試験を乗り越えた理学科学生1年生213名が入学しております。化学プログラムへは理学科1年生の中から推薦学生6名、Frontier science program (FSP) 学生5名の11名が新たににわり、教員および職員共々で総勢100名の学生(1年生11名、2年生(推薦・FSP)14名、3年生35名、4年生40名)と新たな気持ちで大学での活動を行なっていきたいと考えております。

化学プログラムでは「教員と学生」および「学生間」の結びつきをよりスムーズにするため、いろいろな行事が計画されております。これは教員が主導するものもありますが、学生が主体となって計画されているものもあります。入学後直ぐに行なわれる催しとして、教員と1年の推薦とFSP学生が参加する「化学プログラム新入生歓迎懇談会」と、教員と1から4年生に加え大学院生も参加する「タテコン」があります。残念ながら今年度はいままでに両方とも行なうことができず、本来なら入学はじめに行なわれるこれらの会を通して、新入生の方は多くの友人や知人を作る良い機会となったはずでしたが、非常に残です。ただし、化学プログラムではこのような状況に手をこまねいておらず、新入生のみなさんの大学生活をサポートするため、担当の先生方がZoomを用い、授業の履修や日頃の生活状況の把握とサポートを積極的に行なっております。今後事態が改善すれば、「化学プログラム新入生歓迎懇談会」や「タテコン」も行なうことができると考えています。化学プログラム全員が一同に介して、「研究や勉強について話し合える」と期待しております。

ここでは特に新入生の方について詳しく書かせて頂きました。教職員は化学プログラム学生全員について、学習および生活の両面からしっかりと指導していきたいと考えております。このような状況下で至らぬ点があると思っておりますので、化学科・プログラム同窓会の皆様においては、今後ともご支援ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

## 生物

### 生物学プログラムの近況

プログラム長 西川 周一

令和元年度の生物学科の卒業生は19名でした。生物学科の最後の学年の卒業生でしたが、新型コロナウイルス感染症への対応のため卒業式が行われず、研究室ごとの追いコンなどもできなかったため、寂しい3月となりました。卒業生の内訳は大学院進学7名、就職10名(企業4名、公務員5名、教員1名、その他2名)となりました。ただし、大学院への内部進学者数は3名と、近年稀に見る内部進学者数の少なさとなりました。大学院進学者数を増やす取り組みが必要と感じています。

今年は改組4年目を迎え、改組後に入学した学生が卒業研究を開始しました。本年度は3年次編入学の学生も合わせて31名が卒業研究を行っています。生物学プログラムでは、2名の編入生も含めて新たに31名が3年次に進級しました。この2年ほどは、改組前の学科定員よりも10名程度多い学生をプログラムに受け入れており、大学院の進学者数も増えるようにしたいと考えています。

本年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、授業・実習や学生の指導が対面で行えなくなっています。授業などは、ZoomやYouTubeを用いてオンラインで行うこととなり、教員の側も試行錯誤の状況です。本年度の新入生のうち生物学プログラムを選んだフロンティア・スタディ・プロジェクト学生と推薦入学生は合わせて10名でしたが、例年4月に行っている教員との懇談会も中止となりました。6月になって状況も落ち着いてきたため、新入生と教員とのオンライン懇談会を開催し、主に非対面型の授業に関する意見交換を行いました。学生はYouTubeなどのシステム自体の利用は問題なくできているようですが、授業などが非対面となっているため教員への質問などで不便を感じているようでした。しばらくの間非対面型での授業が続きますので、本年度の学生が不利にならないよう対応をしていきたいと思っております。

教員の異動については、昨年10月に鈴木詔子助教が任期を終えました。また、12月に池内桃子准教授が理化学研究所より着任されました。専門は植物発生学です。池内先生は生物学プログラムと自然環境科学プログラムの両方を担当され、今年度も両プログラムから卒業研究生を受け入れております。この人事を機に、両プログラムでの生物学教育の交流が更に深められることが期待されます。



## 地質科学科

### 地質科学プログラム

プログラム長 豊島 剛志

地質科学科としての最終年度末である2020年3月、4年生24名が卒業しました。また、博士前期課程を9名が修了しました。地質科学科卒業生のうち8名が新潟大学大学院自然科学研究科の地球科学コースに進学しました。地質科学科卒業生の就職先は、地質コンサルタント、建設コンサルタント、電力会社、ガス会社、鉄道会社に加えて、国家公務員、地方公務員、教員(それぞれ複数名)など、多岐に渡りました。博士前期課程修了生の就職先としては、地質コンサルタント、建設コンサルタント、資源探査・開発会社の比率が多くなっていますが、国家公務員、教員も加わり、就職先はやはり多岐に渡っています。ありがたいことに、地質系の民間企業や公的機関・団体からの求人が多く、これらの業種に多くの卒業生・大学院修了生が就職しています。

2020年度6月現在、地質科学プログラムには3、4年生それぞれ20数名が所属しています。しかし、今年度地質科学プログラムを希望している1、2年生はそれぞれ10数名と激減し、危機感を強めています。また、大学院自然科学研究科の地球科学コースには、博士前期課程に20名弱、後期課程に10数名の大学院生が在学し、研究を進めています。そのうち外国人留学生が5名です。

2019年度には、大学院生と学部学生が中心となって、地学普及を目的とした6月の「地質の日 サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」と10月の新潟大学 Week の「地質まつり」が実施されました。「地質まつり」の中で、「地質科学科の未来に向けて：卒業生と在校生の集い」が開催され、地質技術者、教育者、研究者などになった卒業生・修了生と在校生、教員との交流・情報交換がなされ、大変有意義な時間でした。2020年度の「地質の日」イベントは新型コロナウイルス感染症対策により、中止になりました。

昨年度終わり頃から、新型コロナウイルス感染症への対策のため、大学での教育・研究に制限が設けられています。例えば、野外実習B(大巡検)では3月に西日本に行く予定でしたが、延期となっています。野外調査・室内実験にも大きな制限がありましたが、最近緩和され、卒論や大学院生の研究に日常が戻ってきそうな気配があります。授業に関してはまだ「非対面型授業」が基本ですが、野外実習を実施できるようになりました。野外実習A(進論)は昨年度より開始時期を少し遅らせて実施する予定です。新型コロナウイルス感染症対策を十分に施した上での実施です。

2019年度には海外留学支援制度(協定派遣)の採択により、理学部の学部生および大学院自然科学研究科大学院生を対象に、短期フィールド体験実習が9月(インド、8日間)、2月(スリランカ、9日間)の2回にわたって実施されました。これにより、学生・大学院生の国際交流が進み、インド・スリランカでフィールド科学分野における最先端の研究環境が体験され、国際的発信能力の向上が図られました。また、2018～

2019年度には独立行政法人日本学術振興会の二国間交流事業が採択され、インドとの共同研究が進められ、研究交流が進展しました。これらの結果、インドから3名の博士後期課程大学院生を迎えています。

地質科学プログラムでは、「フィールドワークのできる人材(野外地質調査能力の高い人材)を育てる」を第一の教育目標とする点に変更はありません。今後とも地質科学プログラムへの暖かいご支援を皆様から賜りたくお願い申し上げます。



## 自然環境科学科

### 自然環境科学プログラム

プログラム長 宮崎 勝己

まず本プログラムの教員に関してですが、2018年度末の酒泉満教授の定年退職、上井進也准教授の神戸大学への転出により、環境生物学分野の教員陣が一気に手薄となってしまいました。そのような中、昨年12月に植物発生学がご専門の池内桃子先生が、理化学研究所から准教授として理学部に着任されました。池内先生は生物学プログラムの主担当で、本プログラムには副担当として関わられますが、特に人員減で危機感の高まる生物学分野の教育への貢献を期待するところです。またその少し前の11月には宇宙化学(天体観測)がご専門の下西隆先生が東北大学から異動されてきました。下西先生は、卓越研究員制度によるテニュアトラック教員として現在は研究推進機構超域学術院に所属しておりますが、2022年度からは理学部所属教員として本プログラムの物理系教育の一翼を担う予定になっております。

学生の方はというと、2017年度の理学部改組から4年目を迎え、いよいよ改組1期生が4年生に進級して参りました。ということは、昨年度で学科最後の入学生達のほとんどが巣立っていったわけですが、私自身彼ら最後の学科生達が入学して間もない2016年の7月に新潟大学に異動し、彼らと歩みを同じくしながら、新潟大学、理学部、そして自然環境科学科・プログラムのあれやこれやに段々と慣れ親しんできたもので、いろいろと思い入れのある学年でした(私の場合思わぬ大病で一年近いブランクが生じてしまいましたが)。彼らの進路先ですが、進学が15名、公務員が10名、企業等8名の内訳です。また昨年度のプログラム配属では、30名の学生が本プログラムを選択してくれました。

最後にコロナウイルスの影響を述べないわけにはいきません。昨年度末の卒業式及び関連イベントは軒並み中止となりましたが、年度が改まるとコロナによる制約は更に厳しくなり、6月に至るまでキャンパス内は閑散としています。本来なら本プログラムでも、様々な顔合わせ会や交流会の類いが実施あるいは企画されているはずなのですが、今は教員・学生が密に集う、などという行為を行えることなど有り得ません。このような中、先日FSP及び推薦で本プログラムを選んだ新入生7名と、ほとんどのプログラム教員が参加したオンライン顔合わせ会が実施されました。多くの教

員・学生間が初対面の組み合わせで、パソコンの画面越しとはいえ学生達の元気そうな姿を見ながら、いろいろと話を交わせたのはやはり楽しい一時でした。学生達が抱いているであろう様々な不安も、少しは軽減されたのではないのでしょうか。いずれにしてもこのような状況の中、プログラム内の縦横の繋がりを今後どう構築していくのか、まさにウィズコロナの時代を見据えた取り組みが問われています。同窓会の皆様におかれましても、より一層のご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

## フィールド科学人材育成プログラム プログラム長 本田 明治

フィールド科学人材育成プログラム（以下、フィールドP）も開設4年目を迎え、FSP学生を含めると1年生から4年生までが揃い、漸くプログラムとしての体裁が整いつつあるところですが、当プログラムの売りでもある3年生向けの多くの実習系科目が夏休みを中心に開講され、過密スケジュールも心配されましたが大きな問題もなく進めることができました。昨年10月には2期生23名が配属となり、1期生が新歓を準備するなど賑やかになってきました。また第1期生はいよいよ研究室に配属されました。理学部と農学部分野横断型プログラムであるフィールドPでは3年生の12月（第4ターム）から研究室に学生が配属されます。農学部では3年生の後半から研究室配属が可能のため、両学部のフィールドP関係者で協議の結果この形となりました。理学部では4年生から研究室配属ですので、これも文化の違いですが、フィールドPでは学生に

とって不利益のないように常に気配りをしているつもりです。ちなみにフィールドPは佐渡自然再生学センターと災害・復興科学研究所も含め約30名近くの教員が関わっておりますが、1学年の学生は理農で20名少々です。今年度の新4年生21名のうち8名が佐渡センター、2名が災害研の研究室の所属となりました。新型コロナウイルスの感染拡大の影響により学生は4月早々から原則在宅研究になっていますが、各研究室でそれぞれにオンラインシステムを活用して研究活動がスタートしています。来年度末には無事に卒業研究発表会が開催され、第1期生を世に送り出すことができる日を楽しみにしております。

フィールドPとしては今年度が完成年度ということになります。後は毎年このサイクルを回していけばよい、とはなりません。これまでの4年間を見直し、来年度に向けてカリキュラムや運営体制の見直しなどを進めているところで、起承転結で言えばこれまでが「起」ならば、これからは「承」でバージョンアップしたフィールドPを展開していくこととなります。更に、接続する大学院課程が自然環境科学研究科環境科学専攻に、大学院学位プログラム「フィールド科学プログラム」として開設される予定です。学部のフィールドPは理学及び農学の専門的知見・知識の習得に重点が置かれていますが、大学院フィールドPでは高い専門的知見・能力に基づいてフィールドに関わる多様な諸問題に対応し、地域社会の再生・活性化に活躍する中核リーダーや上位専門職の養成を目指します。これからの学部&大学院フィールドPに期待頂くとともに、改めて暖かいご支援を賜りたくお願い申し上げます。



## 理学部 後援会 より

後援会会長 諸 橋 丈 之

新潟大学同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、平素は理学部後援会の活動にご協力を賜り厚く感謝申し上げます。

今年は新型コロナウイルスの影響で、令和元年度卒業式、令和2年度入学式も中止になり、新入生、在学生においては第2タームまでオンライン授業となり、今までに経験したことのない事態となっております。

理学部の令和元年度の卒業生の進路状況は、約半数が大学院に進学、約4分の1が民間企業への就職、次いで公務員、教員となっております。就職にあたり学生達が高い期待と評価がいただけるのは、ひとえに先輩である皆様方の社会でのご活躍の賜物であると大変感謝しております。

後援会としても昨年同様、学生研修、実験・実習

への援助、国際交流事業関係等の援助、インターシップ関係等への援助、特別講演開催の援助、新聞の購読、大学祭の援助、学生用設備充実への援助など各種事業に引き続き協力して行きたいと思っています。

また、「本学部と家庭との連携を緊密にするとともに、学部の教育活動を援助し、もって大学教育の理念の達成に寄与する。」という理学部後援会の会則の目的にあるとおり、先生方と保護者が一丸となって学生をバックアップしていきたいと思っています。

同窓会会員の皆様には、学生が自信を持って社会貢献できるようご指導そして応援していただけたらと思っています。今後ともご支援よろしく申し上げます。

## 支 部 だ よ り

### 数 学 科

支部長 武石 文雄

令和2年は、2月28日に開催された理学部の役員会は予定通り開催され、そこで支部の平成30年度途中の事業報告見込みや支部収支決算見込みについて報告を行いました。しかし、3月に入ると、新型コロナの影響ですべての会議等が開催できなくなったことから、支部の役員会は開催できず、メール等で連絡できる役員から意見等をいただいた上で、理学部の事務局に、令和元年度事業実施報告、令和元年度収支決算報告を行いました。また、令和2年度につきましては、事業等の実施見込みが立たず、すべてが白紙の状態となっております。大変変則的ではありますが、実施可能な事業があった場合には、メール等で連絡できる役員の意見等いただき実施し、次に開催される役員会で承認を得る形とさせていただきたいと思っています。

<印南先生・羽鳥先生の退職記念祝賀会の今年度実施を中止いたします>

今年3月に退職された印南先生・羽鳥先生の退職記念祝賀会を9月頃開催の予定で準備を進めておりましたが、新型コロナの影響で、今年度の実施見込みが立たなくなりました。つきましては、大変残念ではありますが、今年度の実施は中止とし、新型コロナが落ち着いたところで、改めて日程等を調整し、連絡させていただきます。

### 物 理 学 科

支部長 越沢 祐一

今年度、コロナ禍により、新潟大学も通常の大学の教育活動は行われておりません。大学は学生がおりませんので閑散としたものでした。

例年当支部が行ってきました教育支援事業の一環であります「物理学科同窓会奨励賞」も行われませんでした。この事業は、副賞としての図書券を、差し上げるものですが、理学部物理学プログラムが、毎年6月に開催するケルビン祭の際に、受賞学生に贈呈してまいりました。また併せて、学部4年生や大学院生が学部1年生に対して勉学の相談相手になってもらう時に係る費用をチームチーリング費として負担してまいりましたが、これも行われておりません。機会がありましたら、行っていくつもりであります。

今年度は、現在このような状況ですが、これからも同窓会物理支部として、皆様からのご提案やご企画があれば支援してまいります。どうかよろしお願いいたします。

### 化 学 科

支部長 畠野 弘通

同窓の皆様、コロナ禍の下、いかがお過ごしでしょうか。テレワーク、リモートワーク、遠隔授業など、パラダイムシフトがおこるのでしょうか。外出自粛などもあり、ご苦労が多いことと思います。

支部としては、役員の方々のご尽力のもと、学部同窓会の役員会や代議員会、総会などに参加をして参りました。しかし、新型コロナウイルス感染防止のため、三月以降、各種の会議はメール審議、学生募集のための高大連携事業は延期となりました。オープンキャンパスはウェブ開催となり、卒業生と在校生の交流事業もできません。コロナの収束を願うばかりです。

化学科支部独自の事業を開催するため、企画を募っております。事務局を通して、お尋ねいただければ幸いです。来春、初めての「理学科」卒業生を迎えます。「化学プログラム」の卒業生を中心に応援したいと思います。今年もご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。

### 生 物 学 科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

いつものことながら役員の私たちも、定例的な会合への出席のみで、活動の数は少なく新しいアイデアの事業もなく恐縮しております。皆様方からは是非お知恵を拝借したいものと思っております。

さて、今年の一月から、新型コロナウイルスが全世界中で猛威を振るい、日本では収まるどころか新たに第二波の来襲に入るのかと心配しております。新潟県では、県立の高等学校、中等教育学校の一斉臨時休校の指示が出て、私の務めている私立高等学校でも足並みを揃えて休校となりました。卒業式は、保護者の出席は一名まで、在校生の出席はなく、来賓もなく、全員がマスク着用のこと、呼名されても返事はしないで起立し、校歌や仰げば尊しも斉唱しないと、まさに異例づくめの卒業式でした。加えて、一ヶ月後の入学式でも全く同じ態様の式典で、一生に一度の式典かと思うと随分と可哀想なことになったものだと不憫に感じております。幸いにも六月下旬からは、ほぼ正常に近い形で教育活動に戻ることができました。

ところで、新型コロナウイルス感染に関わる報道等を見ていますと、医療従事者たちの人員・物資不足の中、極限に近い状態での奮闘振り、また、クルーズ船内での自衛隊員の献身的な活動など素晴らしいことばかりでした。また、日本人の、「要請」を「強制」と読み変えて自分のできる範囲で我慢をして、みんなに迷惑にならないように行動する規範意識など、誇りに思えることもたくさん学ばせていただきました。一方で、ステイホーム時の報道で、いわゆる専門家ではないコメンテーターと呼ばれる方たちが、無責任なコメントを垂れ流している様子なども見ると、日本は何と平和な国なのかと、少々義憤に駆られて一人で喚いたりもしていました。

速くこの惨禍が収まりいつもの日常が戻ることを祈るばかりです。

今年こそはと思いつつ、コロナ禍に託けて動かず、生物学科支部の活動をどのように纏めていくか、悩みは続きそうです。

### 地 質 学 科

支部長 豊島 剛志

2019年度の新潟大学祭(理学部では初雪祭)に合わせて、当支部の支援のもと、「地質まつり」(2019年10月19日～同20日)と「地質科学科の未来に向けて:卒業生と在校生の集い」(2019年10月20日)が開催されました。一般向けの普及活動イベント「地質まつり」には2日間で卒業生を含めて延べ1200名ほどの方々が参加されました。「地質科学科の未来に向けて:卒業生と在校生の集い」では卒業生3名がそれぞれの仕事に関する口頭発表を行いました。同じ会場では卒業生23名によって、それぞれの仕事についての18のポスター発表も行われました。地質コンサルタント会社、建設コンサルタント会社、セメント会社、国立研究開発法人、博物館、教育委員会、NPO法人にて活躍されている卒業生による発表でした(口頭発表:窪島光志氏(2006年度卒、川崎地質

(株)、中村佳博氏(2011年度卒、産業技術総合研究所)、安喰由美氏(2013年度卒、太平洋セメント株)、ポスター発表:件数が多いので省略)。集いででの発表や交流を通して卒業生と在校生との交流が図られ、在校生はそれぞれの進路を考える上で貴重な情報や材料を得ることができたようです。10月19日夕刻から、例年通り理学部玄関前にて「秘酔」が開催され、卒業生・在校生・教員の懇親が深められました。

2020年新年会は新型コロナウイルス感染症対策により中止となりました。

2020年度の集中講義「土壌地質学」の担当は増村通宏氏(昭和61年度卒、(株)新協地質)です。

地質科学プログラムとしての進級論文(野外実習A)が初めて行われます。地質科学科の地質調査法・野外実習関係の授業を解体・改変した新カリキュラムによって教育を受けた地質科学プログラム3年生20数名が長期の野外地質調査に初めて取り組みます。

「地鉦」と呼ばれた地質鉦物学科の時代から、「地質」と略称される地質科学科の時代、そして現在の地質科学プログラムの時代まで、「野外地質調査」・「野外調査に基づく研究」なら「新潟大学理学部の地鉦・地質」と言われていた伝統が続くよう、これからも当支部は教室への協力を惜みず続けていきます。同窓生の皆様には、地質科学教室(地質科学プログラム)と同窓会へのご指導ご鞭撻をいただきますとともに、変わらぬご支援の程、よろしく願いいたします。

新型コロナウイルス感染症対策の影響により大学の教育・研究に制限がかけられている現在ですが、同窓生にお馴染みの大学周辺のお店にもその影響がおよび、休みの状態が続いています。一日も早く新型コロナ

ウイルス感染症が終息し、皆様にお会いできる日が来ますようにお祈りしています。



## 自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により皆様の生活にも大きな影響がでていると思います。同窓会の活動も、今年度は会議や活動の自粛を余儀なくされています。今年度の総会は、第20回という節目であり、数年前から20回目は盛大なイベントをしたいと考えていました。昨年の総会を台風接近のために延期としたこともあって、今年は何としても開催したいと思い、オンラインでの総会とイベントを行うことにしました。

県外在住の方や子育てのためこれまで参加できなかった皆様にも参加していただける機会となればと考えています。詳細は、同封されている案内文書をご覧ください。

さて、昨年度の活動の報告をさせていただきます。昨年度は、後輩支援事業として自主ゼミ支援を久しぶりに行いました。後輩たちの自主ゼミの活動が再び活発になってほしいと思います。また、Facebookによる情報発信を活発に行いました。同窓会の役員として活動するメンバーが少ないため、活動を手伝ってくれる方を増やすことにも力を入れている最中です。今後はオンラインで会議を行う等の取組が出来たらと考えています。

最後になりますが、今後も同窓会の活動にご理解とご協力をよろしくお願い致します。

## 全学同窓会からのお知らせ

### ◆新潟大学・全学同窓会交流会の中止

新型コロナウイルス感染拡大防止と参加者の安全確保等を総合的に判断し、2020年10月17日(土)に開催を予定していた新潟大学・全学同窓会交流会は中止となりました。

### ◆雪華支援事業の募集中止

今般の新型コロナウイルス禍の影響から、学生の課外活動再開は難しく、適切な事業の申請も公平な審査

も困難な状況ですので、2020年度の公募は中止となりました。

### ◆賛助会費のお願い

「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。中止となった2020年度雪華支援事業の予算分については積み立てることとし、別のかたちで学生支援に充てられます。事情をご賢察いただき、引き続き賛助会費のご協力をお願い申し上げます。

## 首都圏同窓会

## と私

## 首都圏支部の現状報告

首都圏支部長 安藤 勝利

今年度の総会(6月20日開催)に向かって、昨年より準備を進めてきており、会場の手配をし、講演して下さる講師を探し、依頼して演題を決めていただきました。

総会に向けて幹事会を開催する手はずを整えた頃に、首都圏では新型コロナウイルスによる「3密」を避け、外出の自粛を要請されましたので、幹事会の開催を延期しました。

しかし、その後事態はますます悪化するばかりで、ついには全国に緊急事態宣言が発令されましたので、やむを得ず4月半ばに総会の中止を決めました。

親睦を第一の目的とする同窓会は「3密」にならざるを得ない行事であります。今後の同窓会の開催は、どのような形態になるのか、いろいろと検討し

なくてはならないと思います。

これからは「with コロナ」を前提に、総会のあり方や親睦について、多くの方々の意見を聞きながら検討していきたいと考えております。

また、理学部首都圏同窓会(理学部同窓会首都圏支部)の活動を知っていただきたく、案内用リーフレットを昨年に続き作成しました。

このリーフレットは首都圏及び近県に在住の同窓会会員の皆様に配布する予定です。これをお読みいただき是非に首都圏同窓会に参加されますようお願いいたします。

これからも首都圏同窓会の活動にご支援、ご協力をお願いいたします。

数学科

新卒業生の近況報告

2020年卒 奥村 奎介

私は今高校教員として働いています。私の高校には普通科は設置されておらず家政科と農業科という専門学科が設置されており、偏差値も高くはありません。しかし生徒は勉強を頑張りたいと思っている者が多いようで、こちらが明瞭で分かりやすい授業をすれば生徒は耳を傾けてくれるなど感じています。教員の仕事は授業外にも多くあり、進路指導に関する仕事や部活動に関する仕事をこなすのに時間を費やしています。日本海から遠く離れた地で働く中で、最初はしんどいと感じることもありましたが、最近になってようやく慣れてきました。上手いかずに辛く感じることもあります。それも自分の強い思い入れの裏返しだと思います。これからも頑張っていきます。



化学科

2020年卒 佐藤 日向

今年の春に理学部化学科を卒業し、私は今、日本原子力研究開発機構で働いています。入社してからの約3ヵ月は、研修や新人教育を通じ、原子力について学んできました。大学で学んだ化学の知識や技術、特に私は核化学を専攻していたのでその知識を使う機会は多いです。最近ようやく現場に入れるようになりましたが、放射性物質を取り扱うので、すぐには作業に従事することができません。そのため今は、先輩の作業の様子を見学してもらい、機器の取扱いや技術について学び、早く仕事を任せてもらえるように頑張っています。



本格的な仕事はこれからですが、何事にも積極的に取り組み、一人前の技術者を目指して日々精進していきたいと思っています。

物理学科

2020年卒 高木 優花

私はこの春に物理学科を卒業し、現在はIT企業に勤務しています。3か月の研修期間を経て、配属後は部門別研修を受けながら、西日本地域を相手にシステムの導入と改修にかかわっていく予定です。

今年の研修はほとんどの日程がテレワークで行われています。対面よりもコミュニケーションが取りづらく、積極的に自分から発信する大切さを実感しています。研修内容は難しいですが、大学時代に学んだプログラミングの基礎は、内容をスムーズに理解する手助けになりました。研修のスケジュール管理や研修報告会での資料作りでは、大学時代を通して培った論理的思考が役に立っていると感じています。

社会人としてSEとしてまだまだ未熟ですが、新潟大学で学んだことを糧に、一人前を目指して日々精進していきたいと思っています。

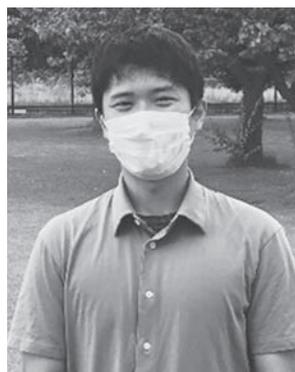


生物学科 実社会に出て

2018年卒 沢 空樹

大学院修士課程を修了して3ヶ月が経ちましたが、私は山形の食品メーカーに勤めています。コロナ禍で入社式が一か月以上も遅れましたが、無事に入社し、現在は工場研修に努めています。

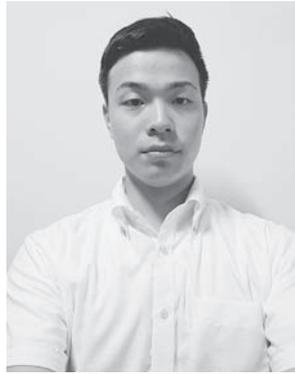
会社(工場)は大学・研究室とは全く異なる環境でとても新鮮である反面、順応するまで大変です。時には、現場の方との解釈のすれ違いでコミュニケーションが上手くいかず困り果てることがあります。しかし、数値でデータを出し、その意味を考え理解し伝えることで、現場にはたらきかけることができると感じてきました。これは学部・大学院時代に学んだことであり、身に付いた力を活かす場面のイメージが段々と出来上がってきました。大学や大学院時代に教員・先輩方々から育てていただいた『物事に対する考え方』で、会社へ社会へ貢献していきたいと思っています。



私は新潟大学理学部地質科学科を今年卒業し、今は新潟県内で中学校教員をしています。

私は大学4年間で地質学について多くのことを学びました。その中でも野外調査では、まだ見ぬ露頭を探し堰堤を超え、滝を超え、崖を上り、沢を詰めていく面白さを覚えました。人が足を踏み入れることない領域に到達したときの優越感、達成感のほかでは感じることない体験でした。普通の日々を過ごすだけではできない経験をし、充実した学生生活を送りました。

大学での経験を生かし、地質学を専門とする教員として、中学生に岩石や地層など地球のことを身近に感じることができ面白いと思ってもらえる授業をしたいです。



私は自然環境科学科を卒業後、地元である長野のIT企業に就職し、地方自治体向けシステムの導入・運用サポートを担当しています。学生時代には研究の関係でそこから中飛び回っていた記憶がありますが、現在も変わらず南は沖縄から北は宮城まで、出張で飛びまわり新規顧客獲得に向けたシステムのデモンストラーションなどを行っています。働き始めて2年が経ちましたが、大学時代に学んでいたことは全く違う分野の職に就いたため、この道でよかったのかと自問自答を繰り返す日々です。いつか、胸を張って「この仕事に就いてよかった」と言えるように、今後とも精進してまいります。



**表3 理学部同窓会整備・振興寄付金 抛出者御芳名(敬称略) 令和2年6月現在**

● 数学科				● 物理学科				● 生物学科					
戸井田 正	井村 悦子	竹内 正文	鶴巻 和康	中村 久子	小林 一男	佐久間 健	水谷 洋二	風間 睦勇	睦勇 睦勇	睦勇 睦勇	睦勇 睦勇	睦勇 睦勇	睦勇 睦勇
岩原 侑	石田 雅義	勝田 勝祐	若杉 正嗣	貝沼 次郎	丸山 敬	高木 広道	前田 義憲	黒沢 昌基	伊藤 静香				
土屋 和平	畑中 正雄	細野 晃	江村英里花	佐藤 英夫	本間 正宣	若林 恒夫	最上 正人	伊藤 志賀壮一郎	志賀壮一郎	志賀壮一郎	志賀壮一郎	志賀壮一郎	志賀壮一郎
渡辺 雅之	八木 文雄	石井 一也	武田 宏樹	高橋庄次郎	橋本 俊彦	白川 保憲	矢代 博行	榎原 靖夫	榎原 靖夫	榎原 靖夫	榎原 靖夫	榎原 靖夫	榎原 靖夫
阿部千鶴子	和久井敬子	牧野 一也	中田 彬	田中 努	海老名郁夫	青柳 秀一	石川富二男	山崎美穂子	山崎美穂子	山崎美穂子	山崎美穂子	山崎美穂子	山崎美穂子
伊藤 道一	加藤 俊男	田中 徹	関野 文瀬	森山 久夫	沓掛 仁	廣田 星一	川田 尚	本野 瑞枝	本野 瑞枝	本野 瑞枝	本野 瑞枝	本野 瑞枝	本野 瑞枝
佐々木正昭	日下 礼子	田中 環	伊藤真知子	小池 潤治	関川 光博	佐藤 三男	鈴木 重行	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博
岩田 隆子	山口 真理	鈴木 哲	佐々木潔朗	関 正	田中 清隆	上林 俊二	高橋 透	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博	菅野 義博
堀 行	伊東 孝芳	二瓶 静男	本間 成和	多田 健一	小海 哲	岩澤 健二	工藤 幸人	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹
小田 武夫	日比登史男	中井 良	高橋 峰洋	畑野 清司	尾崎 睦衛	佐藤 晋	織田 哲	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹
菊地重治郎	吉成 毅	上川 芳浩	中野 泰河	尾崎 睦衛	尾崎 睦衛	佐藤 晋	須藤 智裕	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹
樋浦 卓嘉	佐々木 健	角井 伸一	細井奈津美	洪谷 龍生	洪谷 龍生	高見沢一男	木村 祐伸	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹
井上 昭導	原 幸仁	萩本 小林	矢口 裕健	松本 忠	松本 忠	鈴木 俊男	佐藤 修	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹	高田 和樹
金子 正義	青木 孝史	小林 智博											
永井 健樹	鈴木紀美子	牛丸 智博											
● 化学科				● 地質科学科				● 自然環境科学科					
渡辺 初男	関根 玲子	村山 茂子	昆 信芳	倉又 孝夫	加藤 靖夫	川島 信行	川端 清司	渡部 直喜	渡部 直喜	渡部 直喜	渡部 直喜	渡部 直喜	渡部 直喜
長尾 典	稲川信之助	山田 博之	斎藤 博之	奥村 義郎	近藤 和久	深澤 光	北脇 裕士	佐久間 幹	佐久間 幹	佐久間 幹	佐久間 幹	佐久間 幹	佐久間 幹
佐藤 ヒサ	大橋 幸子	石塚 力	重富 潤一	大西 淳	吉田 慈	小川 泰正	滝本 俊明	榎本 武敏	榎本 武敏	榎本 武敏	榎本 武敏	榎本 武敏	榎本 武敏
鰻目 一郎	殿内 重政	尾崎 恭子	鈴木華奈子	畑中 博文	中戸 義興	中川 充	柴崎 俊明	小島 玄生	小島 玄生	小島 玄生	小島 玄生	小島 玄生	小島 玄生
佐藤 茂司	間 和彦	谷口 素子	沼崎 恭子	中山 輝也	塚田 誠	横堀 正純	杉山 和稔	田利江 二期	田利江 二期	田利江 二期	田利江 二期	田利江 二期	田利江 二期
寺尾 巖	土屋真知子	孫田 淳	沼崎 恭子	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	八木 郁恵	八木 郁恵	八木 郁恵	八木 郁恵	八木 郁恵	八木 郁恵
井古田仁司	星野 洋子	山岸 良一	石山 友英	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
大島 桂典	黒須 克己	三ツ寄敏雄	中林 正名	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
赤沢 宏	藤原 直士	吉井 文子	猪俣 哲	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
半田 進	畠野 弘通	吉井 青柳	近藤 健一郎	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
久我 直温	生野 久人	三上 正人	山田 幹	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
小島 光恵	福島 幹雄	飯田 英典	佐藤 洋平	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
岩野 宣哉	内山 昭博	白井 昌伸	根岸 裕太	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
谷川 義夫	本間 悟	古家 昌伸	根岸 裕太	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
青木 英二	一柳 卓夫	岩崎 匡臣	鈴木 佑輔	石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
吉川 義雄	羽深 等	松田 高至		石野 禮夫	塚田 誠	横堀 正純	田中 力	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博	長谷川千博
● 旧職員				● 自然環境科学科									
池田 泰治	石塚 紀夫	小林 巖雄	古橋 勝久	中島 陽子	松橋 麻里	天笠 泉	杉山 博崇	唐木 彰仁	唐木 彰仁	唐木 彰仁	唐木 彰仁	唐木 彰仁	唐木 彰仁
徳江 郁雄	長谷川美行	小林 渡部	本間アヤ子										

表1

## 2019年度 理学部同窓会決算

一般会計

収入の部		費目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説明
収入の部	終身会費・寄付金	終身会費	5,000,000	4,999,000	-1,000	
		終身会費	4,000,000	4,000,000	0	新入生 200名×20,000円
		寄付金等	1,000,000	999,000	-1,000	同窓会整備・振興寄付金 286名
	他会計繰入金			0	0	
	雑収入	78,000	91,516	13,516	預貯金利息、全学同窓会資料会員配送費清算、等	
繰越金	794,056	794,056	0			
合計		5,872,056	5,884,572	12,516		
支出の部		費目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説明
支出の部	会議費	175,000	102,516	-72,484	諸会議交通費、会場費	
	広報費	「会報」発行費用	1,745,700	1,328,742	-416,958	
		「会報」発行費用	400,000	374,220	-25,780	「会報20号」7500部
		「理学部は今」発行費用	380,000	0	-380,000	発行形態が変更になり今年度は予算執行なし
		会員宛資料配送費	960,000	948,930	-11,070	6697名分
		その他	5,700	5,592	-108	HP運営費
	事業費	理学部支援事業費	1,265,000	307,900	-957,100	
		理学部支援事業費	720,000	0	-720,000	卒業祝賀会は新型コロナ禍で中止
		支部事業補助費	450,000	266,700	-183,300	数学、自然環境科学、地質科学各学科支部へ助成
		名簿編集費	20,000	0	-20,000	
		その他事業費	75,000	41,200	-33,800	特別講演会経費
	負担金等	489,350	489,350	0	全学同窓会賦課金	
	支部交付金	460,000	460,000	0	支部及び首都圏支部	
	事務諸経費	123,000	121,509	-1,491	光熱水費、消耗品、等	
	事務局費	400,000	365,900	-34,100	事務局人件費	
	人件費	200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当	
	予備費	514,006	0	-514,006		
他会計(積立金特別会計)繰出金	500,000	500,000	0			
次年度繰越金	0	2,016,655	2,016,655			
合計		5,872,056	5,884,572	12,516		

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
特別会計	2018年度までの繰越金			15,500,170	定期預金
	2019年度繰入れ金	500,000	0	16,000,170	
	2019年度利息	128		16,000,298	定期利息のうち定期元金へ振替えられる部分 他は一般会計へ

表2

## 2020年度 理学部同窓会予算

一般会計

収入の部		費目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説明
収入の部	終身会費・寄付金	終身会費	5,000,000	5,000,000	0	
		終身会費	4,000,000	4,000,000	0	入学定員200名×20,000円
		寄付金	1,000,000	1,000,000	0	同窓会整備・振興寄付金等
	他会計繰入金	0	0			
	雑収入	78,000	79,000	1,000	預貯金利息、全学同窓会同梱発送費清算 等	
繰越金	794,056	2,016,655	1,222,599			
合計		5,872,056	7,095,655	1,223,599		
支出の部		費目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説明
支出の部	会議費	175,000	175,000	0	諸会議交通費・会場費等	
	広報費	「会報」発行費用	1,745,700	1,773,700	28,000	
		「会報」発行費用	400,000	400,000	0	
		「理学部は今」発行費用	380,000	380,000	0	
		会員宛配送費	960,000	988,000	28,000	会報等配送運賃
		その他	5,700	5,700	0	HP運営費
	事業費	理学部支援事業費	1,265,000	1,265,000	0	
		理学部支援事業費	720,000	720,000	0	
		支部事業補助費	450,000	450,000	0	
		名簿編集事業費	20,000	20,000	0	
		その他	75,000	75,000	0	特別講演会事業
	負担金等	489,350	489,350	0	全学同窓会賦課金	
	支部交付金	460,000	460,000	0	6支部及び首都圏支部	
	事務諸経費	123,000	143,000	20,000	光熱水費、消耗品、等	
	事務局費	400,000	400,000	0	事務局人件費	
	人件費	200,000	200,000	0	後援会パート手当	
	予備費	514,006	1,689,605	1,175,599		
他会計繰出金	500,000	500,000	0	2020年度積立金		
合計		5,872,056	7,095,655	1,223,599		

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
特別会計	2019年度までの積立金			16,000,298	
	2020年度積立金	500,000		16,500,298	
	2020年度利息	85		16,500,383	

